

【社名】 吉田家本は「伊勢神社」、『大日本史』では「伊勢神社」と訓んでゐる。『國內神名位階記』（山本本）、『備前國神名帳』（西大寺本）、同（廣谷本）、同（大瀧本）では「從四位下伊勢明神」、神上金剛寺本では「從三位伊勢大明神」とする。

江戸時代の備前の地誌のうち『備陽記』（享保六年）は「伊勢神社」、『備陽國誌』（元文四年）、『吉備温故秘録』（寛政年中）、『東備郡村誌』（天保年中）は「伊勢宮」と記す。また、明治初年の史料には未だ「伊勢宮」と記されてをり、明治中頃の史料では「伊勢神社」となる。現在地元では「いせのみや」と呼ばれてゐる。

【由緒】 この神社の由来を記す諸書、例へば『寸筈乃塵』（安永七年）、『吉備温故秘録』、『備前國式内書上考録』（明治初年）、『縣社伊勢神社取調帳』（明治二十八年）、『伊勢神社由緒記』（昭和三十三年）はいづれも『倭姫命世記』の「御間城入彦五十瓊殖天皇即位五十四年丁丑遷吉備國名方濱宮二年奉齋于時吉備國造進三采女吉備都比賣又地口又地口御田」と云ふ記事にその由来を求めてゐる。『寸筈乃塵』では日本書紀によつて「崇神天皇六年までは天照大神の御神を天皇の大殿の内に祭り給ふに、その神勢を畏て共に住給ふに安からず、故に此としに

天照大神を豊鍬入姫命（崇神の皇女なり）に託せて倭國笠縫の邑に祭り奉り給ふ、それより八十九年を経て垂仁天皇二十六年十月に、今の伊勢國度會宮に御鎮座まします」とし、更に『倭姫命世記』によつて「崇神天皇六年九月、天照大神及草薙劍を朝廷より倭國笠縫邑にうつしはしめ奉り、豊鍬入姫命をして齋奉りける、次に丹波國吉佐宮、次に倭國伊豆加志本宮、次に木の國奈久佐濱宮に遷り給ふ、此四箇所の宮に凡四十五年を経て、同帝の五十四年丁丑に吉備國にうつり給ひ、こゝに四年御鎮座ありて、同五十八年倭國三輪の御諸の嶺の上の宮にうつり給ひ、其後十一箇所の宮々を経て、垂仁天皇二十六年丁巳のとし十月に今の伊勢國度會の宮に御鎮座ありし（中略）、此國名方はまの宮にありしは今の伊勢國に御鎮座ありしより三十八年前の事也、かくいちじるしき大神にてまします」と説明してゐる。即ち天照大神及草薙劍が一時遷座した「吉備國名方濱」に、その縁によつて祀られたのが伊勢神社であると云ふ。『吉備温故秘録』はそのいきさつについて、伊勢神社社司の説として「延喜式に御野郡伊勢神社と神名帳に載せられしは則當社の御事にて、當地に往古より豊受皇太神宮を奉崇敬御社あり、當社の東に當つて濱といふ所の北、當社の敷地に往古姫太神の御社有り、此御神體を當社へ遷

し奉り、御相殿に御鎮座成し奉る事、當社の社殿也」と載せ、更に編者大澤惟貞が「此濱に姬太神の御鎮座ありしいはれを私に考ふるに、崇神天皇五十四年丁丑に、吉備國名方濱宮に遷て四年がうち齋奉る時に、吉備國造采女吉備都比賣、又地口の御田を進ると倭姫の世記に見えしは此濱村ならんか、今御鎮座跡といふは隣村西河原村なれ共、古は濱と計り此邊をいひしを、後世河原村と別りたるならんか」と註記してゐる。『縣社伊勢神社取調書』（明治二十八年）、神社明細書（昭和二十七年）は「名方」を舊上道郡中田村（現在は岡山市賞田の内）に比定して「名方、中田ハ音ノ同一ナルヲ以テ名方ヲ中田ト稱スナリ」と記してゐる。この中田に隣接する國府市場（舊上道郡國府市場村、現在岡山市國府市場）には備前國府社があるが、和名抄には「國府は御野郡に在り」とあつて郡名が一致しない。御野郡と上道郡は旭川をはさんで相對してをり、國府は初め御野郡御野郷にあつて後に上道郡上道郷に移つたのか、あるいは旭川の河道がかはつて郡界がかはつたのかのいづれかであらうが、不明である。伊勢神社が現在の鎮座地に移された時期、いきさつなどは不詳。また名方濱を舊御野郡濱野村（現在、岡山市濱野）に比定し、濱野村の内宮（祭神は伊勢内宮に同じ）を鎮座地として、伊

【祭神】 現在は天照大神を主神とし、豊受大神と栲幡千千姫神を相殿に祭るとしてゐる。『備陽國誌』は「伊勢内外宮同神」とするが、『寸斨乃塵』『東備郡村誌』は祭神を伊勢の外宮に同じとして、「是即ち開闢元祖の神、國常立尊也」としてゐる。また『神社明細帳』では天照大神、豊受大神を祭神とするが、『延喜式内神社國史見在之神社』は天照大神のみをあげてゐる。時期が下つて『縣社伊勢神社取調書』になると、現在と同じく、天照大神を主神とし、相殿に豊受大神と栲幡千千姫神を祭ると記されてゐる。

境内には末社として、天満宮（祭神菅原大神）、稻荷神社（倉稻魂命、猿田彦命、大宮賣命）二社、十五末社―御門神（豊磐窓神、櫛磐窓神）、風神（級長津彦命、級長津姫命）、多賀宮（神直日神、大直日神）、荒神宮（八十枉津日神）、熱田神宮（日本武尊）、春日神社（天兒屋根命）、五元神社（水波能賣神、火産靈神、久々能智神、金山彦神、埴安姫命）、齋宮（倭姫命）、興玉神社（猿田彦命）、鈿女神社（天鈿女命）、伊雜宮（伊佐波登美命）、荒神社（素戔鳴命）、戸隱神社（天手力雄命）、今村神社（天照大神、應神天皇、天兒屋根命）、會魂神社（神産日神、高御産日神、玉積産日神、生産日神、足産日神、大安

勢神社を外宮とする説もあつて、『寸斨乃塵』『吉備温故秘録』などに紹介されてゐるが、『吉備温故秘録』は「當社（濱野の内宮）を式内と云説あれども是非也」、『備前國式内書上考録』（明治初年）は「（内宮を）式内伊勢神社なりと云ふは疎漏の考なり」としてこの説を斥けてゐる。

近世の社領十石。『神社明細帳』（明治三年）は「社領現米高拾石、所在小畑町、但當社境内小畑町ヨリ地子金納社務家祿ニ致給與居申候」と記してゐる。何時頃與へられたのかその初めは不明であるが、延寶二年（一六七四）に岡山藩が社領を寄進した記録が『撮要録』（文政六年）に収録されてゐる。明治六年に郷社、明治十五年縣社に列格。

【所在】 岡山市番町二丁目十一番二十號（舊岡山下城下、小畑町）。岡山驛北東一・五キロメートル。

『吉備温故秘録』によると小畑町は「町内伊勢宮あるに依て一番町、二番町、三番町、四番町あたりまでを伊勢宮と今以云ふ。（中略）初は宮地廣くしてやう／＼商家は四五軒計ありしが、岡山繁昌して此宮地次第に商家を建し」ため、延寶頃までは伊勢宮町と呼ばれ、寶永頃伊勢國にも小畑といふ地名があるとの理由で小畑町と改められたと云ふ。番町は和名抄所載の御野郡廣世郷のうちか。

女神、御食津神、事代主神、天鈿女命）、馬神様のほか、貞享三年（一六八六）に城下鷹匠町の厩屋根から伊勢宮へ移されたといふ幸延神社（祭神保食神）が祀られてゐる。

『神社明細帳』には攝社として榎本神社（本社より南へ六丁、上出石町鎮座）が記されてゐるが、榎本神社は昭和二十一年に獨立し、現在攝社はない。

【祭祀】 宮司は見垣安邦氏。伊勢神社のほか天計神社（岡山市北方）、天神社（岡山市三野）、八幡宮（岡山市津島）、若宮八幡宮（岡山市原）、榎本神社などの宮司を兼務してゐる。『延喜式内神社國史見在之神社』は伊勢神社の項に「舊神宮見垣宏海先祖見垣國重寛文中當社神主相勳以來明治四年^{辛未}七月二十七日御改正迄七代社役相續致シ申候」と記す。また『上道郡八幡宮書上』（明治初年）は社務として見垣宏海を記し、「社務見垣宏海先祖不詳、見垣權少輔國重マテ伊勢宮神主相勳申處、同人悴近江國和江延寶五年十二月當社ノ社勢申付、貞享三年閏三月二十二日叙正六位下任近江守權少輔、國重ヨリ當代マテ七代、當社寄附社領（現米高三十九石七斗九升）ノ内現米九石七斗一升三合社務家祿ニ分配致給與ス」とあげてゐる。見垣家には代々の靈位を記した卷子一卷が傳はつてゐる（成立年

代不詳)。これには見垣久左衛尉藤原國定(寛永二年卒、備中國丸川家ヨリ見垣家へ養子ニ入ルトイフ)に始まり、安邦氏の先代見垣豊まで三十三人(うち十八名は女性)の名前が記されてゐる。この中から江戸時代に位階、官名を名乗つてゐるものをあげると、見垣權少輔藤原國重(元祿七年卒)、正六位下近江守藤原朝臣國和(享保十九年卒)、正六位下周防守藤原朝臣國澄(寶曆四年卒)、見垣民部藤原國休(安永五年卒)、見垣左衛門藤原國豊(文化十四年卒)、見垣左衛門藤原國永(天保十二年卒)の六名である。見垣左衛門藤原國永の長男國通は幕末期、岡山藩の兵制改革の中で神官達によつて組織された社軍隊の隊長となつてをり、その子正香も従軍してゐる。これに對し藩主から賞として大刀が與へられたが、その時平賀元義が詠んだ歌(一幅)が見垣家に傳へられてゐる。

見垣君御大刀賜はれるを賀て詠る 源元義

賜ひたる大刀取佩きて事しあらハ國の御楯と出立てわ
か背

祭日は十月十六・十七日。『神社明細帳』は九月八日・九日とするが、『延喜式内社取調書』(明治七年)では現在と同じく十月十六日・十七日となつてゐる。また『延喜式内神社國史見在之神社』も十月十六・十七日としてを

り、恐らく太陽曆が採用された時点で祭日がかはつたと思はれる。

伊勢神社では昭和三十三年頃まで「御神事ミカミツ」と呼ばれる神幸祭が行なはれてゐた。見垣安邦氏の話によると、小早川秀秋が文祿・慶長の役の凱旋のお禮に、行列して伊勢神社と酒折宮(現在岡山神社、岡山市石關町)へ参拜したのがその起りだと云ひ、幟・槍・弓・眞神・鉾・神官・太鼓・獅子・幟の順で行列を作つて氏子地域をまはつたと云ふ。

氏子地域は小畑町、出石町、弓之町、一番町、八番町、西河原。現在氏子戸數はおよそ一、五〇〇戸から二、〇〇〇戸と云ふ。明治初年には七五七戸(『延喜式内神社國史見在之神社』)、昭和二十七年の神社明細書は氏子人數三、六〇〇人としてゐる。

現在の伊勢神社の年間行事は次のとおり。

元旦祭(一月一日)、紀元祭(二月十一日)、春祭(四月十六日)、夏祭(七月二十七日)、茅輪祭(七月三十一日)、秋祭(十月十六日)、例祭(十月十七日)、七五三祭(十一月十五日)、感謝祭(十一月二十三日)、大祓祭(十二月三十一日)、除夜祭(十二月三十一日)、月次祭(毎月一日)。

【境内地】 七六八坪七一。『延喜式内社取調書』『延喜式内神社國史見在之神社』など明治初年の史料は二反三畝二五歩としてゐる。

【社殿】 本殿、檜皮葺、神明造。間口一間・奥行一間。幣殿 三・七五坪、入母屋造、本瓦葺。釣殿 八坪、切妻造、本瓦葺。拜殿 九坪、入母屋造、本瓦葺。このほか舊神樂所、七・五坪。社務所、一八坪。表門、一・五坪。裏門、一坪がある。

伊勢神社の鎮座地、舊小畑町付近は江戸時代に何回か火災に遭つてをり、伊勢神社の社殿も何度か焼失したと云ふ。比較的新しい火災では多五郎火事(寶曆七年、一七五七)と天明四年(一七八四)の野々村火事と呼ばれるものがあつて、多五郎火事では社殿を焼失、野々村火事の際には社務所だけが災難に會ひ、他の社殿は無事だつたと云ふ(昭和三十三年『伊勢神社由緒記』)。これからすれば現在の主要な建物は寶曆七年の多五郎火事後の建築と思はれる。その後何度か改修が行なはれて現在に至つてゐる。

境内の金石など次のとおり。

鳥居一基、年紀銘なし。石燈籠一對、文化十年。石燈籠一對、文久二年(末社天満宮の境内)。石燈籠一對、明治元年。石燈籠一對、昭和三年。手水鉢「心如水」一基、文

政四年。「喜樂」二字額、舊岡山藩主(六代)池田齋政筆。「伊勢神社」篇額、卜部良長筆。

(竹林榮一)